

●ヘラルド経済 헤럴드경제

[ライフ 出版]

〈ハンゲルの誕生〉から〈韓国を知〉まで…日本の知識人の眼で出会う

記事入力 2014年10月9日 11:56

ヘラルド経済＝イ・ヒョンソク記者

ハンゲルと韓国の言語生活についての驚くべき洞察と研究を盛り込んだ労作『ハンゲルの誕生』で、韓日両国の知性界に新鮮な衝撃をもたらした日本の野間秀樹・国際教養大学客員教授が、またしても実験を敢行した。韓日両国の知識人140名に〈韓国を知〉を問い、その答えを1冊の書物に編んだのである。韓国からは46名、日本からは94名が参加している。本は去る2月、日本でまず出版され、8ヶ月後、この度、韓国語に翻訳刊行された。

野間秀樹教授は韓国語版の序文で「現在の日本語の世界で同時代の韓国文化は既に高い評価を受けていると言える」、「言語自体を媒介とした分野よりは、感性的な接近がはるかに可能な、映画、音楽、美術といった分野を、さらに柔軟に幅広く受け入れてきた」と述べている。しかし「文化を広く受容しているありように比べ、〈韓国を知〉に関わる問いを投げかけるやいなや、日本語の世界はかすんでしまう」とし、これは「日本語圏で鑑賞し、享受し、愛好し、感動する対象としての韓国の文化は存在しても、読み、聞き、考え、語り、苦悩し、共にし、自らのものと考えて生きてゆく対象としての、韓国の知は、事実上、存在していなかったことを意味する」と述べている。

だから『韓国を知を読む』はアジアの知の共同体のための試みであり、交流のための違いの確認なのだと考えようである。野間秀樹教授は、韓日両国の学者、評論家、言論人、作家、大衆文化専門家などの知識人たちに〈韓国を知〉と出会った本、1冊－5冊を挙げ、それについて思いを書いてほしいと要請した。その結果は、野間秀樹教授が言うように、「こんなものまで知っているとは」という感嘆と、「せいぜいこれくらいしか知らないとは」という失望との間にある。何より、日本を代表する知性94名の面々にも驚くべきであるし、李退溪(イ・テグ)と李栗谷(イ・ユルゴク)の儒学理論から最近の韓国の若い小説家たちの作品に至るまでを併せ持つ、分野と推薦書目録の幅の広さは、想像以上である。それぞれの筆者の文章を2000字内外と制限した点が、惜しまれるが、却って大衆的には読みやすい。韓国の読者たちには「日本の知識人の眼に写った韓国を知」、「我々も知らなかった我々の知」が知的興味をかき立てる。こうした種類の企画ではお決まりの接待用修辞、いわゆる「祝辞批評」もない。韓国の読者たちには時に居心地の悪いほどに率直である。

日本の代表的な思想家であり哲学者として高名な柄谷行人は、李御寧(イ・オリョン)の『縮み志向の日本人』を、韓国を知と出会った本として挙げている。柄谷行人は、この本が「日本の文化を、非歴史的な観点から見るという点で、同時代の日本人論、日本文化論の枠組を

超えるものではなかった」とし、「たとえば、日本企業が小型車やパソコンに向かったのは、「縮み」志向によってではなく、大型ではアメリカにかなわなかったからである」と指摘している。続いて、世界史と日本史を一瞥し、歴史的な結果論としての縮み志向を語る。しかし日本人は「縮む」とときには、独創的では素晴らしいが、「延び広がる」のは不向きで、破綻する、そう述べた李御寧教授の、時代に先駆けた洞察を高く評価し、今日本は「縮み」の独創性をなくしてしまい、空疎な膨張主義がはびこっていると診断する。

中国思想史家・川原秀城は鄭道伝(チョン・ドジョン)の『三峰集』と退溪・李滉(イ・ファン)の『退溪先生文集』、栗谷・李珥(イ・イ)の『栗谷先生文集』、宋時烈(ソン・シヨル)の『朱子大全^{さつぎ}筭疑』、星湖・李瀾(イ・イク)の『星湖先生文集』を通じて朝鮮の思想と哲学を概括し、「偉大なる知の宝庫」に数えている。

日本語に翻訳された韓国の小説は極めて限られているが、これを通して韓国の知を経験したという人々も少なくなかった。ロシア文学者・貝澤哉は李承雨(イ・スンウ)の『真昼の視線』について「ほとんど神学的ともいえる峻厳な不在のヴィジョンこそ、現代日本文学が喪失して久しいもの」と言った。映画監督・西川美和は李滄東(イ・チャンドン)の小説集『男の中の男』を挙げたが、映画についての評が卓越している。彼女は李滄東監督の映画を1つ1つ数え上げながら、「どの作品も狂騒に頼らず、静謐を気取らず、絹糸のような細い糸に腹の毛穴から音もなく忍び込まれ、いつのまにか五臓六腑を締め上げられる」と書いた。

出版人・熊沢敏之は「アジア圏で唯一”近代市民革命”を経験した国」と韓国を呼んだが、『韓国の知を読む』の多くの筆者たちが金芝河(キム・ジハ)の作品や、『全泰壺(チョン・テイル)評伝』など韓国の独裁政権と民主主義の時期を扱った本を、多数選んでいる。

反面、韓国の読者たちにはいささか具合が悪いであろう主張を繰り広げた、日本の知識人たちもある。文学者・夏石番矢は、『三国遺事』、『三国史記』を論じ、金闕智(キム・アルチ)は日本から渡って行った古代朝鮮の、脱解王(タレおう)は古代日本出身の新羅王だと言う。小説家・荒山徹は、韓国の歴史学界の民族主義を批判し、評論家・関川夏央は「韓国が固執するナショナリズムとは、実は古来かわらぬ”よそ者嫌い”ではないか」と問うた。

しかし古代および中世日本に伝わった韓国文化を理解してこそ、日本をきちんと見得るのだと強調する知識人たちもあつた。出版人・龍澤武の場合は(金九の)『白凡(ペクポム)逸志』を推し、「金九は民族主義者だが、そのナショナリズムは近代日本のナショナリズムと同質なものののだろうか」と反問し、「日本のナショナリズムは始まりからして”勢力拡張主義”ではなかったか。その対極でこそ、どのような普遍的な精神が生まれていたかに注目しなければならぬだろう。『白凡逸志』はそれを問うていると私は思う」と述べた。

分野が多彩で、視角は多様であるが、『韓国の知を読む』の試みと模索は、次のような、建築家・團紀彦のことばに、その意味を求めることができるであろう。

「日中韓の歴史認識問題と領土問題によって、三国が益々冷え切った状況となり、政府間

のみならず市民の間にも感情的亀裂が増していくことが危惧される今日、私は顔の見える〈知〉の文化的交流だけがこれに光明をあてるものであると信ずるものである。」

●京郷新聞 経향신문

2014年10月8日(水) 22面 文化

多様性こそ韓国の知の本質

『韓国・朝鮮の知を読む』を出版した野間秀樹

「韓国の知」に関わる書籍の推薦の依頼に

韓日の知識人たち 推薦目録に傾向性なく

1つの言語圏から産出される知識の全貌を概観するのは、一人の人間の知的な能力の範囲を超える営みである。2010年、『ハンゲルの誕生』を表し韓日両国で反響を引き起こした野間秀樹・国際教養大学客員教授が、この困難な作業に挑んだ。1人でなしえないことであったがゆえに、多くの人々の智慧を集めることになった。韓国と日本の知識人140名に問いを投げかけた。日本の知識人たちには「どんな本を通じて韓国の知を知ることとなったか」と問うた。韓国の知識人たちには、「韓国の知を知ってもらうにはどんな本を紹介するか」と尋ねた。

『韓国の知を読む』(ウイズダム・ハウス)はその結果物を編んだ書物である。日本では文芸批評家・柄谷行人、和田春樹・東京大学名誉教授、在日僑胞作家・金石範(キム・ソクポム)など知識人 94名が、韓国からは文学批評家・白楽晴(ペク・ナクチョン)、金炳翼(キム・ビョンイク)、建築家・承孝相(スン・ヒョサン)、小説家・成碩濟(ソン・ソクチュエ)、金衍洙(キム・ヨンス)など46名が参画した。

「韓流を通じて韓国の文化は広く知られたが、知の次元では日本の知識人たちの間ではほとんど認識されていないと言っても、過言ではありません。」韓国語版刊行を迎え、7日韓国を訪問した野間秀樹教授は、巧みな韓国語で言った。

依頼書を受け取って、一度で返事を送ってくれた人々は全体の20%に過ぎなかった。「日本語圏の知識人たちの場合、“企画はいいが、自分はよく知らない”という答えが大部分でした。一番困ったのは、“忙しくて書けない”という答えをもらったときです。「よく知らない」という方々には、すがりつく余地もあるわけですが、忙しいと言われますと、本当に返す言葉もないわけですね。韓国語圏の筆者たちは主題があまりに大きいという理由から首を振る。企画を始めた昨年3月から、日本語版が出る今年2月まで、こうした人々と野間教授の間に行き来した電話とメールは数千通に上る。

日本語圏の筆者たちが推薦した本は、全部で265種である。複数推薦を受けた本はこのう

ち26種に過ぎない。最も多い推薦を受けたのは、野間秀樹教授の『ハングルの誕生』で、6人からの推薦があった。この本は2010年日本で刊行され、3万部を数え、日本の知識人社会の話題となった。次に尹東柱(ユン・ドンジュ)詩集『空と風と星と詩』、金重赫(キム・ジュンヒョク)小説集『楽器たちの図書館』で5人からであった。他には詩人・申庚林(シン・ギョンニム)の詩集『駱駝』、小説家・姜英淑(カン・ヨンスク)の小説集『リナ』、李光洙(イ・グァンス)の『無情』、小説家・玄基栄(ヒョン・ギヨン)の『スニのおじさん』、小説家・申京淑(シン・ギョンスク)の『母をお願い』などが2人の推薦を受けている。推薦図書全体の27%が文学作品であった。次には韓国の歴史、韓日関係に関する本が多かった。

韓国語圏の筆者たちは計135種を推薦している。ただ5種だけが重複推薦を受けた。『金洙暎全集』と『私の文化遺産踏査記』がそれぞれ4人からで、最も多くの推薦になる。『土地』と『定本 李箱文学全集』、画家・李禹煥(リー・ウーフアン)の『出会いを求めて』はそれぞれ2人に推された。韓国語圏の筆者たちの場合、推薦書の31%が文学作品である。ハングル関連の学術書がこれに次ぎ、人文社会科学の本の比重は相対的に低かった。ユン・テホのウェブ・トゥーン『未生』は漫画では唯一推薦目録に上った。

野間秀樹教授は韓国語圏と日本語圏の筆者たちの推薦図書目録から、「これといった傾向を見出すのは難しい」と語った。「面白いのは、(推薦書が)非常に多様だということです。この多様性こそ”韓国の知”だと言えるのではないのでしょうか。」

彼は今回の作業を出発点だと言った。「ヨーロッパの知を読む」のようなプロジェクトであれば断る人も多くはなかったでしょう。そういう点では心残りなこともあります。日本で「韓国」という単語と「知」という単語が一緒に並びうるのだということが知られたという点では、意味があるのでは。これから先、他の人々がさらにもっと補うと思います。」本の日本語版はこの1日、優れた出版物に与えられるパピルス賞の受賞が決まった。

チョン・ウォンシク記者

●聯合ニュース 연합뉴스

「知の最前線で出会った韓国の知を集めたかった」

記事入力 2014年10月08日 09:10送稿

『韓国・朝鮮の知を読む』翻訳書を刊行した野間秀樹教授

(ソウル＝聯合ニュース)イム・ギチャン記者

「日本語圏では既に分野別に韓国学研究者たちの研究がたくさんなされてきました。けれどもそこにおいて韓国はどこまでも研究の「対象」だったわけです。この本では「知」という同

じ平面で韓国を見据えたいのです。」

著書『ハンゲルの誕生』を通じてハンゲルを「知」という観点から照らした言語学者である野間秀樹・国際教養大学客員教授が、「韓国の知」についてまた異なった企画の成果物を最近、国内に翻訳出版した。韓国語圏と日本語圏の知識人140名の文章を集めて編んだ『韓国の知を読む』（ウィズダム・ハウス）だ。

韓国語版刊行に合わせて訪韓した野間教授は7日、インタビューで「日本語圏で”韓国”ということばと”知”ということばが共に現れる本は、ほとんどなかった」と述べ、「韓国の知に対する日本語圏と韓国語圏の知識人たちの視角を、共有する契機を創りたかった」と語った。

野間教授は「知」を「私たちが生を営むのに不可欠の、知性に関わる全て」と定義しつつ、「もちろん長い歳月に伝授される技術など、“暗黙知”などといったものがあるが、この本ではとりあえず言語化された、翻訳された知を扱った」と言う。

同書について「学者たちの研究成果を集めた論文集ではない」と述べる野間教授は、筆者選定にあたって韓国と関連があるかどうかに、重きは置いていないと説いた。彼は「むしろそれでこそ真の韓国の知に辿り着けるだろう」と言う。

本の構成自体はとりわけ特別なものではない。両国で活動する知識人たちがそれぞれ読んだ本の中から、自分が「韓国の知」と触れあうことになった著作を挙げ、紹介する方式である。一見、よくある書評集に見えるが、筆者たちの幅は相当に広い。

韓国の読者の立場からは日本語圏のどんな筆者たちがどんな本を通じて韓国の知に接したのかに関心が行くだろう。思想家・柄谷行人、歴史学者・和田春樹など、有名な学者たちはもちろん、言論人、出版人、作家、市民運動家、映画監督に至るまで、非常に多様な分野に従事する94名が文章を書いている。

容易に接しうる主題ではないので、固辞しようとする筆者も少なくなかったという。野間教授は、たびごとに電話とEメールでこうした人々と接触、幾度にわたって説得して原稿を依頼した。

「韓国研究者や韓国学に関与する人々、韓国と接触する人々だけでなく、日本語圏の“知の最前線”に関わっている人々であれば、どこかで韓国の知と接する地点があったに違いない。それを持ち寄りたかったのです。柄谷行人氏のように韓国と関わりのある方もあるし、ない方々もあります。」

筆者が多様なだけに、言及された著作も非常に広い領域に及んでいる。『三国史記』、『三国遺事』、鄭道伝(チョン・ドジョン)の『三峰集』から尹東柱(ユン・ドンジュ)と金芝河(キム・ジハ)の詩、『全泰壺評伝』、朴景利(パク・キョンニ)と黄皙暎(ファン・ソギョン)の小説など、よ

く知られた著作があるかと思えば、金重赫(キム・ジュンヒョク)のような現代作家の小説、ミュージカル『地下鉄一号線』のシナリオのような、意外な作品も含まれている。韓日関係が両国の重要な懸案であってみれば、これを扱う書籍も多くの筆者が挙げている。

野間教授は「2つの言語圏の知識人たちの間の違いを浮かび上がらせることより、多様性に重きを置いた」と述べ、「最初から韓国の知について多様な視角が出されるだろうと予想はしたが、実際原稿が集まってみると、思った以上にずっと多様性は大きかった」と語った。

たとえ本は名目上「韓国の知」を扱ってはいいても、本質的には知は国家的な境界づけが困難な概念なのだと、彼は強調した。

「国家という概念は近代以降に確立したものです。日本の政府が“日本固有の領土”云々などと言っても、そんなものはないわけです。北海道や沖縄が今、日本の領土であるからといって、最初から日本の地であったなど見ることができるでしょうか。日本などという国家も現代のイデオロギーの産物です。そうしたところに埋もれてしまって、“知”も見えなくなるわけです。韓国の知、日本の知といったぐあいに境界を引きがたいことを証明できる本となれば、と思います。」

野間教授は「多少荒削りであるかもしれませんが、こんなふうにも2つの言語圏から見る韓国の知を整理する出発点を創れば、次の段階にはいかようにも進み行けるでしょう」と述べ、「次は日本語圏と韓国語圏から見る韓国の美を、その次には韓国の心を扱う計画」だと語った。

● 『ハンギョレ 21』 한겨레 21

隣国から見た“我らの知”

[今日のハードカバー] 野間秀樹編 『韓国の知を読む』

2014. 10. 20 第1032号

日本の言語学者・野間秀樹教授は、学者、翻訳家、作家など日本の知識人たちに、「皆さんが韓国の〈知〉と出会った本を挙げてほしい」と便りを書いた。個人的に韓国の知的財産と触れあった瞬間を問う質問に、答えた94名の日本の人々が、最も多く挙げた本は、野間秀樹が書いた『ハンデルの誕生』、次に尹東柱(ユン・ドンジュ)の詩集『空と風と星と詩』、金重赫(キム・ジュンヒョク)の短編集『楽器たちの図書館』という順であった。

日本の人々に「韓国」と言えば、「ドラマ」や「K-POP」のようなことばが検索関連語のように思い浮かぶのに比べ、韓国と「知識」や「知」は見慣れない組み合わせなのだという。日本語圏に翻訳された韓国文学と人文書が、極めて制限されているという状況を、140名の韓国と日本の筆者が書いた『韓国の知を読む』(野間秀樹編、金京媛[キム・ギョンウォン]訳、ウィズ

ダム・ハウス刊)のところどころで、窺い知ることができる。朝日新聞の記者・桜井泉は李泳禧(リ・ヨンヒ)とイム・ホニョンの対談集『対話』を挙げて、「この本の日本語版がまだない。相変わらず、日本は隣国の知に無関心で、無知だ」と批判したが、我々として、日本についてはましだとも、思えない。

韓国と日本、長い間柄だが、互いを知らない2つの国の〈知〉について語る。同書で評論家関川夏央は「韓国にナショナリズムがない。韓国のナショナリズムは実は”よそ者嫌い”と”身びいき”なのではないか」と率直な問いを投げかける。出版人・龍澤武は、逆に、金九(キム・グ)の『白凡(ペクポム)逸志』に言及しながら、「日本のナショナリズムは始まりからして勢力拡張主義ではなかったか」と反省しつつ、「その対極でこそ、どのような普遍的な精神が生まれていたか、注目しよう」と提案する。本を読むことは、いつも自らへ向かう営みだという証左である。

もちろん、本で李滄東(イ・チャンドン)監督の『男の中の男』を推薦した西川美和のような人や、日本人は孔枝泳(コン・ジョン)『トガニ 幼き瞳の告発』や『サムスンの真実』を読まなければならないという桜井泉のような人々もいる。早稲田大学の松永美穂教授は「自分が知り得た文学に関して、はたして“韓国らしさ”を基準にコメントができるか、いささか心許ない」と述べ、「韓国に対して持っていたイメージを払拭する新しさを発見した」という理由から、ハン・ガン、金重赫(キム・ジュンヒョク)、ク・ヒョンといった作家の文学を挙げた。

本を編んだ野間秀樹の舞を舞うがごとき文章は、外国人が韓国文化に捧げた最高の賛辞として、記録するに値する。彼は同書の末尾で「ハングルは日本のエクリチュール(文字)が経験したことのないような、途方もない危機の連鎖のうちを断固と生きてきた。…ハングルで書かれた文字列は、私たちが学ぶべき、知の闘争の隊列である」と結んでいる。

本に参画した韓国語圏の知識人46名は、〈韓国の知〉を代表する本として、『金洙暎(キム・スヨン)全集』と、兪弘濬(ユ・ホンジュン)の『私の文化遺産踏査記』を最も多く挙げている。

ナム・ウンジュ『ハンギョレ』文化部記者

●ファイナンシャル・ニュース The financial news 파이낸셜 뉴스

[文化]

韓国の〈知〉を読む、韓・日知識人たちが選定した韓国の本

イ・セギョン記者 入力 2014年10月9日 17:44, 修正 2014年10月9日 17:44

日本人学者・野間秀樹は、ある日、韓国と日本の知識人たちに手紙を書いた。

「韓国の知を知るためのプロジェクトを進めています。韓国の知と出会うことになった本を推薦し、それについての皆さんのお考えを書いてください」

この手紙を受け取った映画監督・李明世(イ・ミョンセ)は、自分が読んだ『李仲燮(イ・ジュンソプ)評伝』について、このように書いた。「本を買ったその日、私は徹夜でこの本を読んだ。そして本の最後の章を閉じながら、”ああ、芸術家の人生とはこういうものなのだ!”と思った。亀山郁夫・東京外国語大学前学長は、金芝河(キム・ジハ)の『不帰』についてこう評した。「朴正熙政権に反旗を翻し、二度にわたって死刑判決を受けた金芝河を思うと、我が身が凍るような思いがしたことを記憶する。何という強い人が韓国にはいるのか。」

野間秀樹はこのようにして集まった、韓日両国の知識人140名の答えを、本に編んだ。韓国人、日本人の知識人たちが推薦した、400冊の本が盛り込まれた。1000通を超えるEメールと電話が行き来する、困難で熾烈な作業であった。原本である『韓国・朝鮮の知を読む』は、日本でパピルス賞受賞作に選定された。パピルス賞は学問的業績とアカデミズムの理想が達成された著作物に与えられる、権威ある賞である。

知性人たちが選んだ韓国の知であってみれば、多少難しげに感じられるかもしれないが、決してそうではない。尹東柱(ユン・ドンジュ)の詩集『空と風と星と詩』、兪弘濬(ユ・ホンジュン)の『私の文化遺産踏査記』、朴景利(パク・キョンニ)の『土地』、申京淑(シン・ギョンスク)の『母をお願い』など、ベストセラーに上った作品も数多く含まれている。こうした理由から、自分が知る本を、知性人の視線で今一度眺める機会ともなりうるだろう。

日本人学者が韓国の知を求めるために没頭する過程は、そのこと自体だけでも既に新たな刺激を与えてくれる。日本の知性人たちが韓国の知をどのようなものであると語るのか、韓国人と日本人の知性人たちが同じ本を読み、その評価はいかなる点が同じで、いかなる点が異なるのか、それを見守るのも、興味深い。

イ・セギョン記者

●韓国経済 한국경제 (創刊 50 周年)

[本の村]

韓・日知識人の思いを込める

入力 2014年10月9日 23:51:24 修正 2014年10月9日 23:51:24

紙面情報 2014-10-10 A27 面

『韓国の知を読む』

野間秀樹編 | 金京媛(キム・ギョンウォン)訳 | ウィズダム・ハウス | 752 頁 | 2 万 8000 ウォン

「感性的な接近が可能な、韓国の映画や音楽、美術などは日本において深く、そして幅広く受け入れられた。しかし韓国の知については、日本語圏の優れた知識人たちでさえ、自信を持って語るができない。韓国の文化のうち、〈知〉は、日本語圏においてまるで暗黒のように陥没しているかのごとくである。」

日本の野間秀樹・国際教養大学客員教授は、このように主張する。野間教授は 2010 年、世界文字史におけるハングルの革命性を、徹底した理論的根拠と卓越した文体で説いた『ハングルの誕生』によって、よく知られた人物。彼が韓国の〈知〉に接近しようと、2013 年 3 月から日本の知識人 94 名、韓国の知識人 46 名から本を推薦してもらい、それらの本について双方の知識人たちの思いを盛り込んだのが、『韓国の知を読む』である。去る 2 月日本において刊行された『韓国・朝鮮の知を読む』の韓国語版だ。

韓国の〈知〉と出会える本を推薦した、両国の知識人の面々は多様である。歴史学者・和田春樹、思想家で文芸評論家の柄谷行人をはじめ、学者、言論人、出版人、作家、市民運動家、映画監督、建築家など、多くの分野の専門家たちが本を推し、文を寄せた。日本語圏から推薦された本が265種、韓国の筆者たちの推薦書が135種となった。

柄谷行人は李御寧(イ・オリョン)の『縮み志向の日本人』を挙げ、「日本人は「縮む」とときには、独創的ですが素晴らしいが、「延び広がる」のは不向きで、破綻すると李御寧は述べている。1980 年代以降の日本は拡張する方向に転換しつつある。だとすれば、今後、危ういのではないか、と李御寧が言う。李御寧の見通しは正しかった」と述べている。

日本の代表的な出版社である平凡社の出版人・龍澤武は、金九(キム・グ)の『^{ベク・ボム}白凡逸志』を推薦した。彼はジョージ・オーウェルがナショナリズムとパトリオティズム(愛国心)を区別し、愛国心を「自分の属する特定の地域と特定の生活様式に対する献身」と定義した事実を紹介しつつ、こう説明する。「隣国の民族主義には〈白凡的愛国心〉があるということを知らなければならない。それはなによりも日本のナショナリズムを反省するための大きな手がかりとなるだろう。」

和田春樹は、故・李泳禧(リ・ヨンヒ)の『分断民族の苦悩』を挙げ、「彼が書いた文章の緻密さと鋭さは驚くばかりだが、実にやさしい人であった」と回顧している。

ソ・ファドン記者

●光州日報 光州일보

2014年10月10日金曜日 第19842号

〈韓国知〉を知ってもらう どんな本を紹介しよう

『韓国の知を読む』

野間秀樹編

白楽晴、承孝相、和田春樹…

韓日の知識人140名が参与

知の全てを明らかにする

ここに、韓日両国の知識人たちに投げかける2つの問いがある。まず日本の知識人たちに尋ねた。「あなたはどんな本を通して韓国の知を知ることとなったか」、いま1つは韓国の知識人たちに尋ねる問いである。「韓国の知を知ってもらうには、あなたはどんな本を紹介するか」

この同じ質問に答えるために、韓日両国の知識人140名が集った。前者の問いには柄谷行人、和田春樹・東京大学名誉教授、僑胞作家・金石範など、知識人94名が参加した。後者の質問には文学批評家・白楽晴(ペク・ナクチョン)、建築家・承孝相(スン・ヒョサン)、小説家・成碩濟(ソン・ソクチェ)など46名が参与した。

言語学者であり日本の国際教養大学客員教授である野間秀樹が編んだ『韓国の知を読む』には、韓国の〈知〉についての両国の知識人たちの考えが盛り込まれている。この本は去る2月、日本で出版され、反響を起こした『韓国・朝鮮の知を読む』の韓国語版である。

編著者である野間秀樹教授の履歴が興味深いのは、彼が『ハングルの誕生』で2012年にハングル学会主催の周時経(チュ・シギョン)学術賞の受賞者に選定された学者だという事実である。ハングル学会が与えるこの賞を、外国人が受けたのは始めてであった。時あたかも、独島問題、平和憲法など引火性ある問題で、韓日両国の気流が尋常ならざる時点に選定された。彼の受賞は、内外の耳目を引くに十分であった。

それでは、果たして韓国の〈知〉とは何だろうか？ またそれはどのように表現しうるのだろうか？ この本で韓国語圏と日本語圏の知識人たちは自らが出会った〈知〉と触れあった瞬間瞬間を語っている。〈知〉はこの本が支え、志向するキーワードである。

韓国人である私たちは、韓国の〈知〉を根拠に、話し、聞き、考え、表現する。この過程で〈私〉という人間を創り、成長しながらも、そのことの土台である〈知〉の存在はさとり得ない。だから私たちは、ある特定分野の知識人、専門人にはなじみが深くとも、それら全てのものの総体である〈知〉という単語の実体については知らない。

野間秀樹教授は、プロジェクト(2013年3月－2014年2月)を進めながら、韓国の〈知〉と

出会うことに至った本を、1冊ないしは5冊ほど挙げ、理由を書いてくれるよう、要請した。この過程で1000通を超える電話とEメールが行き来した。

その結果、意外な答えが返ってきた。いや、明らかになった傾向は、圧倒的な支持を受けた本がないという事実である。おそらく〈知〉の最も本質的な特徴がそこに現れたのであろう。特定の本を韓国の〈知〉であると断言するには、あまりにも広大な前提が横たわっているのである。

日本語圏の筆者たちが推薦した本は、全部で265種である。そのうち、複数の推挙を受けた本は、26種に過ぎない。目立つことは、編者である野間秀樹教授の『ハングルの誕生』が6人の推薦を受けている点である。

この本は2010年、日本で刊行され、3万部が売れ、日本の知識人社会に少なからぬ反響を呼び起こした。おそらくはプロジェクトを遂行する編者の著書であるから、いくらかのアドバンテージはあったろう。いま1つ、日本の知識人たちが〈ハングル〉の知的成果を最も意義ある韓国の知と感じているという意味でもある。

次に多く推挙された本は、尹東柱(ユン・ドンジュ)詩集『空と風と星と詩』、そして金重赫(キム・ジュンヒョク)の『楽器たちの図書館』だった。

韓国語圏の知識人たちは、全部で135種を推薦している。重複する本は、日本語圏の筆者より少なく、わずか5冊だけがこれに該当する。最も多い推薦を受けた本は、『金洙暎(キム・スヨン)全集』と兪弘濬(ユ・ホンジュン)の『私の文化遺産踏査記』が4人から、最も多くの推薦を受けた。このほかに朴景利(パク・キョンニ)の『土地』と李箱(イ・サン)の『定本 李箱文学全集』、李禹煥(イ・ウファン)の『出会いを求めて』が2人の推挙となっている。

両国の知識人が共に挙げている本は、崔仁勲(チェ・イヌン)『広場』、兪弘濬『私の文化遺産踏査記』、申京淑(シン・ギョンスク)『母を願ひ』、朴景利『土地』、野間秀樹『ハングルの誕生』である。学問的価値、作品性、大衆性を併せ持つ本が評価されている。

一つ面白いのは、韓日両国の知識人がいずれも文学作品を多く挙げているという点である。一般的に〈知〉であれば、社会科学書や研究書を思い浮かべがちだが、文化水準と情緒を見せてくれる文学作品を、重要な〈知〉の要素と見なしていることを意味する。

〈ウィズダム・ハウス 2万8000ウォン〉

パク・ソンチョン記者

●文化日報 문화일보 munhwa.com

[文化] 掲載日時 2014年10月10日(金)

〈韓国を知る〉の手がかり探し 日本の知識人の考えを読む

和田春樹、金炳翼(キム・ビョンイク)など思想家、作家、映画監督 両国の140名400冊を推薦

『韓国を知る』／野間秀樹編、金京媛(キム・ギョンウオン)訳／ウイズダム・ハウス

韓国を知るとは何か。

『ハンゲルの誕生』を通じて、真摯かつ熱情的に、世界の文字史において有するハンゲルの意味を探索した、日本の言語学者・野間秀樹は、この容易ならざる問いへの解答を試みる。彼が〈韓国を知る〉に没頭することになったのは、アイロニカルにも、日本の中の〈韓国を知る〉の不在による。「基本的に日本において韓国は〈知る〉という単語と並べて論じられたことがない。映画、美術、ドラマ、歌など、韓国の芸術と大衆文化は高く評価されているのに、〈知る〉として共にする対象ではなかった」というのである。彼は、韓国が積み上げてきた知的世界の結果物が、相応の評価を受けられないという危機感から、〈韓国を知る〉プロジェクトを企画するに至る。

具体的に彼は、日本と韓国の知識人たちに「韓国を知る」と出会うに至った本を、1冊から5冊ほど挙げ、これについて思いを書いてほしい」と要請した。しかし日本の筆者たちの相当数は、「韓国を知るについて知るところがない」と答えを断ってきた。韓国の筆者たちは、「膨大な主題に見合う文章を書く自身がない」と拒む。これに対して彼は、「韓国を知る全体についての本ではない。韓国を知る」と触れあった瞬間があるはずだ、そうした瞬間を共有したい。韓国を知るに近づく、貴い糸口を得たいのだ」と、再び要請した。こうして、評論家・柄谷行人、歴史学者・和田春樹、小説家・津島佑子、中村文則など、日本の知識人94名と、文学評論家・金炳翼(キム・ビョンイク)、白楽晴(ペク・ナクチョン)、小説家・申京淑(シン・ギョンスク)、金衍洙(キム・ヨンス)、映画監督・李明世(イ・ミョンセ)など、韓国の知識人46名、計140名の筆者から本を挙げてもらい、これについて思いを述べた文章を受け取った。この過程で野間秀樹は1000通を超える E メールと電話をやりとりせねばならなかった。本は今年初めに日本で刊行され、日本の権威ある出版賞である、パピルス賞を受賞する。

140名の筆者が推薦した〈韓国を知る〉と触れあった本は、『三国遺事』、『三国史記』から李滉(イ・ファン)の『退溪文集』、金芝河(キム・ジハ)、尹東柱(ユン・ドンジュ)、申庚林(シン・ギョニム)の詩集、朴景利(パク・キョンニ)、申京淑(シン・ギョンスク)、ハン・ガン、金重赫(キム・ジュンヒョク)の小説、ミュージカルの台本と、様々な分野の専門書、日本で刊行された韓国関連書籍など、多様である。圧倒的な推薦を受けた本もない。日本の筆者たちが推薦した本は265冊、重複推薦は26種に過ぎない。それも大部分は2人の推薦を受けたくら

いである。最も多く挙げられた本は、6人が推薦した、編者の著作である『ハングルの誕生』である。続いて尹東柱の詩集『空と風と星と詩』、金重赫の短編集『楽器たちの図書館』などがある。韓国の筆者が選んだ本は、計135種で、最も多い推薦は『金洙暎全集』、兪弘濬(ユ・ホンジュン)の『私の文化遺産踏査記』(4名推薦)、朴景利の『土地』、李箱(イ・サン)の『定本 李箱文学全集』、李禹煥(リー・ウーフアン)の『出会いを求めて』(2名推薦)であった。

筆者たちの文章は2, 3頁と短いものの、その内容は長さに比べようもなく、幾重にも重要な意味を見せてくれる。韓国の読者としては、当然、韓国の筆者の文章よりも日本の筆者の文章により関心が向く。これを通して、私たちも知らない、私たちの姿が見えるからである。私たちならぬ、見知らぬ他者の視線から見た〈韓国の知〉、それも込み入った過去のことも持つ日本、日本の知識人の視線で見た〈韓国の知〉である。これに加えて、近代化過程で西洋を志向し、東アジアに無関心であった日本の視線、1980年代まで独裁に喘ぐ恐怖の国家というイメージ、そうでありながらアジアで唯一近代市民革命を成し遂げた国家という評価、韓国に無関心だが、夜更けにはラジオから韓国の放送が聞こえてくるほどに近い隣人、韓流で新たに日本社会に登場した韓国等々、複雑なイメージと視線が交差する。二重三重に重なった窓を通して現れる私たちの姿である。これと共に興味深いのは、韓国を眺めやる視線から発見できる、日本の知識人たちの姿である。

たとえば和田春樹は、1970年代の軍事独裁政権と闘う人々の姿に感動するあまり、この人々がなぜこれほどまでに長い間絶望的な闘争を持続し得たのかを知りたくて、韓国の本と雑誌を集め始めたと言う。彼が推薦した本は、李泳禧(リ・ヨンヒ)の『分断民族の苦悩』と金芝河の『飯・活人』(お茶の水書房)である。柄谷行人は李御寧(イ・オリョン)の『縮み志向の日本人』を推薦した後、以前、日本が縮み志向の文化であると解釈した李御寧の考察は限界をはらむと考えるものの、1990年代以降、日本社会に蔓延するむなしい膨張主義を見ながら、日本が縮み志向には独創的だが、延び広がることには不向きで、破綻するという李御寧の指摘を想起させると述べた。ロシア文学者・亀山郁夫は幼いときからヨーロッパばかりに憧れていたがゆえに、韓国は精神的に最も遠くにある国だったが、金芝河を通して、韓国にこれほどまでに強い人がいるのかと思うに至ったと、文芸評論家・加藤典洋は、詩人・尹東柱を通して自らの東アジア観が変わったと述べている。

また思想家・子安宣邦は、日本人という存在を根底から動揺させられることへの恐れが、明成皇后(閔妃)問題を直視しようとする自らの意志を妨げてきたと、打ち明けてもいる。このように本に繋がる日本の知識人たちが考える韓国の知、また彼らと触れあった瞬間は全て異なっている。知が持つ範囲の広さによる、当然の結果であって、一つに括り得ない多様なスペクトラムを見せる。けれども、こうしたスペクトラムを見ることができるということ、日本が韓国の知を眺めるこの多様性に出会えるのも、私たちには新たな知的経験である。

チェ・ヒョンミ記者